

# 第十回 八戸市遺跡調査報告会



田代遺跡



田面木遺跡



坂中遺跡



八戸城跡

展 示

展 示・報 告 遺 跡

● 松ヶ崎遺跡  
八戸市大字十日市 縄文

● 船場 昌子  
八戸市内丸 近世

● 八戸城跡

● 坂中遺跡  
八戸市大字新井田 平安  
横山 寛剛

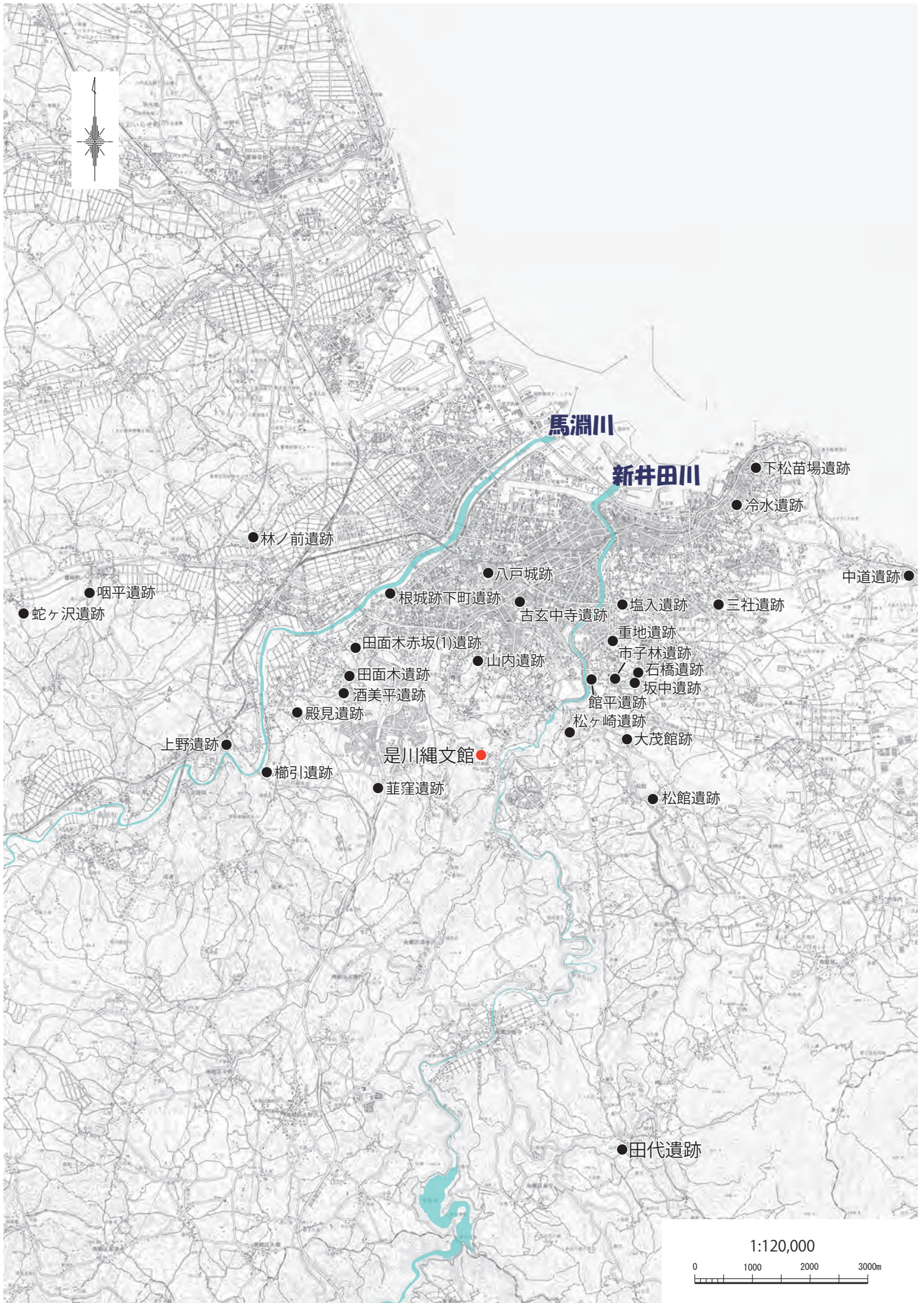
● 田面木遺跡

● 田面木遺跡  
八戸市大字田面木 飛鳥〜奈良  
杉山 陽亮

● 田代遺跡

● 田代遺跡  
八戸市南郷区字島守 縄文  
田中 美穂

2011年11月12日(土)  
主催：八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館  
会場：体験交流室



平成 23 年度発掘調査遺跡位置図

	遺跡名	時代・種類	所在地(八戸市)	調査原因	調査面積	調査期間	
試掘調査	1	櫛引遺跡	縄文・集落跡	大字櫛引	個人住宅・倉庫建築	8.3㎡	4月7・15日
	2	上野遺跡	縄文・集落跡	大字上野	個人住宅増築	4.9㎡	4月13日
	3	田面木遺跡	平安・集落跡	大字田面木	アパート建築	92㎡	4月13日
	4	山内遺跡	平安・散布地	大字糠塚	個人住宅増築	16.5㎡	4月23日
	5	石橋遺跡	平安・集落跡	大字新井田	福祉施設建築	94.5㎡	4月27日
	6	中道遺跡	縄文・散布地	大字鮫町	個人住宅増築	14㎡	5月12日
	7	八戸城跡	近世・城館跡	内丸	個人住宅増築	6㎡	5月12日
	8	葦窪遺跡	縄文・集落跡	大字田面木	鉄塔建設	23㎡	5月14日
	9	古玄中寺遺跡	縄文・散布地	大字類家	個人住宅増築	5㎡	5月19日
	10	重地遺跡	縄文・集落跡	大字新井田	個人住宅増築	4.5㎡	5月21日
	11	三社遺跡	縄文・散布地	大字大久保	墓地造成	158.5㎡	5月24日～27日
	12	根城跡下町	中世・城館跡	大字根城	個人住宅増築	14㎡	6月3・30日
	13	櫛引遺跡	縄文・集落跡	大字櫛引	道路工事	37.4㎡	7月8日、8月2日
	14	八戸城跡	近世・城館跡	内丸所在	店舗建設	12㎡	5月27日
	15	塩入遺跡	縄文・集落跡	大字新井田	店舗建設	12㎡	7月15日
	16	大茂館跡	中世・城館跡	大字妙	道路工事	18㎡	8月2日
	17	館平遺跡	平安・集落跡	大字新井田	個人住宅建築	45㎡	8月2・3日
	18	松館遺跡	縄文・集落跡	大字松館	鉄塔建設	41㎡	8月5日
	19	田面木赤坂(1)遺跡	縄文・散布地	大字田面木	個人住宅建築	8㎡	8月26日
	20	蛇ヶ沢遺跡	縄文・集落跡	大字豊崎町	個人住宅建築	9㎡	9月22日
	21	咽平遺跡	縄文・集落跡	大字豊崎町	個人住宅建築	37㎡	10月7日
	22	市子林遺跡	奈良・集落跡	大字新井田	大館中学校耐震工事	10㎡	8月6日～19日
本発掘調査	1	田面木遺跡	平安・集落跡	大字田面木	田面木小学校耐震工事	17㎡	8月10日
	2	石橋遺跡	平安・集落跡	大字新井田	下水道工事	50㎡	8月30日～9月3日
	3	重地遺跡	縄文・集落跡	大字新井田	下水道工事	146㎡	9月6日～10日
	4	下松苗場遺跡	縄文・散布地	大字鮫町	下水道工事	10㎡	10月18日
	5	冷水遺跡	縄文・散布地	大字鮫町	下水道工事	30㎡	10月18日～22日
	6	酒美平遺跡	平安・集落跡	大字田面木	個人住宅建築	50.6㎡	4月6日～26日
	7	八戸城跡	近世・城館跡	内丸	集合住宅建築	32㎡	4月9日・6月30 ～7月12日
	8	田面木遺跡	平安・集落跡	大字田面木	農地造成	2,600㎡	4月26日～6月24日
	9	松ヶ崎遺跡	縄文・集落跡	大字十日市	個人住宅増築	28㎡	4月30日・ 6月8日～14日
	10	田面木遺跡	平安・集落跡	大字田面木	盛土造成	28㎡	6月16日～ 6月23日
	11	坂中遺跡	平安・集落跡	大字新井田	土留め・盛土造成	20㎡	5月31日～6月4日
	12	林ノ前遺跡	平安・集落跡	大字尻内町	自然崩壊	131㎡	8月3日～10月8日
	13	殿見遺跡	平安・古墳	大字八幡	明治中学校耐震工事	250㎡	8月20日～9月14日
	14	坂中遺跡	平安・集落跡	大字新井田	農地造成	250㎡	8月25日～10月5日
	15	田代遺跡	縄文・集落跡	南郷区大字島守	農地造成	1,704㎡	8月30日～10月15日

平成 23 年度発掘調査遺跡一覧

## 1. 遺跡の概要

田代遺跡は、八戸市南郷区大字島守字番屋に所在し、八戸市と階上町のほぼ境に位置します。階上岳山麓に立地し、調査対象範囲の遺跡の標高は215～220mです。

平成16・17・21年度に、青森県埋蔵文化財調査センターによって道路改良工事に伴う発掘調査が行われており、縄文時代、弥生時代、近世の遺構・遺物がみついています。そのなかでも、縄文時代中期末頃の竪穴住居跡が多く確認されており、人々の活動が最も盛んであったことが分かっています。今回の調査は、個人の農地造成のため発掘調査です。

はじめに調査対象範囲約8,600㎡の試掘調査を行いました。試掘調査の結果、今年度は1区とした西側部分、調査面積405㎡の本調査を実施しました。

## 2. 調査成果

調査では、縄文時代中期末～後期初頭の集落跡がみつかりました。ここでは、中期末の竪穴住居跡と後期初頭の土坑群について紹介します。

中期末の竪穴住居跡は、今から約4,500年前のものです。竪穴住居跡は2棟みつかり、どちらの住居跡にも「複式炉」とよばれる炉があります。SI1竪穴住居跡は、長さ5.4m、幅4.4mの楕円形の住居跡です。周囲を石で囲った炉（石囲炉）と掘り込み部（前庭部）の2つの構造をもつ複式炉が住居跡の東壁際につくられています。今までの調査結果から、複式炉は斜面の低い方につくられる傾向がありますが、この住居跡の複式炉は斜面に沿うようにつくられていることが特徴です。生活する空間が狭くなったためか、住居を広くした痕もみられます。SI2竪穴住居跡は、直径約7mの円形の住居跡です。土器を埋めた部分（土器埋設部）・石を組んだ部分（石組部）・掘り込み部の3つの構造をもつ複式炉が住居跡の南壁際にみつかりました。この複式炉には、土器埋設部に接するように、他の炉より古い時期のものと考えられる炉があります。複式炉のすぐ近くには、単体の石囲炉もみつかりました。

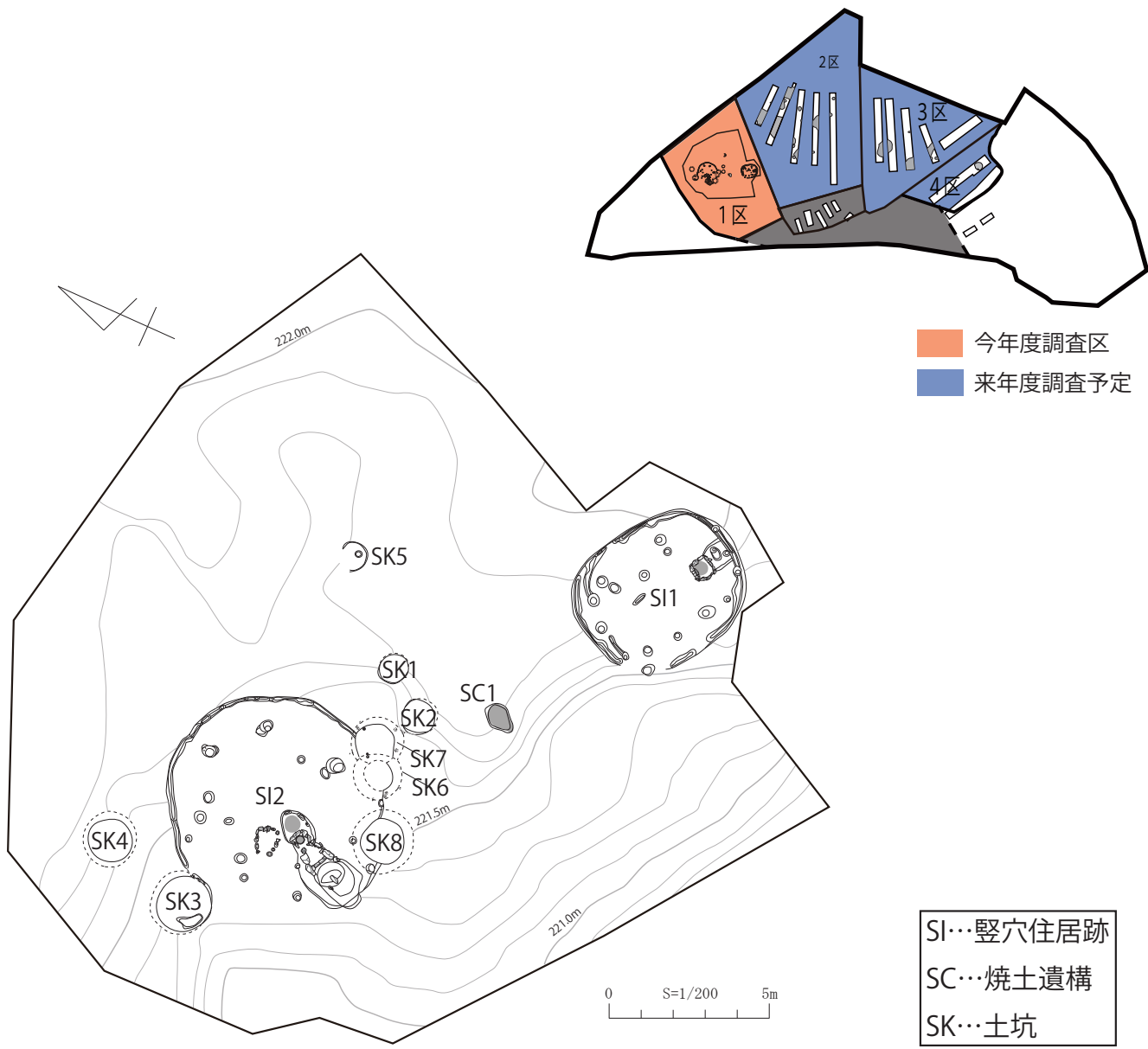
複式炉は、縄文時代中期の終わり頃に、東北地方南部を中心に東北地方や北陸地方でさかんにつくられる特徴的な炉です。複式炉の用途には様々な説があり、土器埋設部はアク抜きに用いる灰の保存・火を絶やさないう火種を保存する場所、石組部は調理・暖房・照明・アク抜き用の灰をとる場所、前庭部は焚口や出入り口などと考えられています。

後期初頭の土坑は8基みつかりました。フラスコのような形をしており、食料を保存するための貯蔵穴として使用されていたと考えられています。底面の四隅に小さい杭穴がある土坑もみられ、貯蔵穴に蓋をするときの支えがあったのかもしれませんが。また、炭化材や土器が埋まっていた土坑もありました。

## 3. まとめ

今回の調査では、南西向きの緩斜面に縄文時代中期から後期初頭にかけての集落が営まれていたことが分かりました。来年度の調査では、試掘調査で数棟の竪穴住居跡が確認されていることから、緩斜面の続きに集落の広がりを確認できると考えられます。県の調査結果と合わせながら、当時のムラの様子について考えていきたいと思えます。

（田中 美穂）



田代遺跡 1区遺構配置図



S I 1 竪穴住居跡



S I 2 竪穴住居跡

## 1. 遺跡の紹介

本遺跡は馬淵川沿いの標高 25 ～ 50 m の丘陵地にあります。遺跡は東西約 400m、南北約 800m の広さがあり、市内の遺跡のなかでも大規模な遺跡です。本遺跡では飛鳥～奈良時代、平安時代の集落（ムラ）跡が発見されています。遺跡内では宅地化が急速に進み、市教育委員会が昭和 62 年（1987 年）以降、開発に伴う発掘調査を断続的に実施しています。今回は今年度実施された 37 地点、38 地点の 2 地点の調査成果について紹介します。

## 2. 調査成果

〔調査期間〕 37 地点：平成 23 年 4 月 26 日～ 6 月 24 日

38 地点：平成 23 年 6 月 16 日～ 6 月 23 日

〔遺 構〕 37 地点：縄文時代 = 溝状土坑 2 基、土坑 1 基

飛鳥～奈良時代（7 世紀から 8 世紀前半）= 竪穴住居跡 7 棟、竪穴遺構 1 棟

奈良時代以降 = 円形周溝 2 基、掘立柱建物跡 2 棟、溝跡 2 条

38 地点：飛鳥～奈良時代 = 竪穴住居跡 1 棟

〔遺 物〕 土師器・縄文土器・鉄製品・土製品・石器

【縄文時代の遺構】 縄文時代の溝状土坑は動物を捕る際に使用された落とし穴と考えられています。丸い形の土坑には底に杭を打ち込んだと推定される小穴が並んで発見され、逆茂木をたてた落とし穴と推定されます。

【奈良時代の遺構】 今回調査された飛鳥～奈良時代の竪穴住居跡の特徴は、平面の形は隅丸方形で、4 本の主柱を持ち、北側の壁にはカマドと煙を逃がすための「煙道」が屋外にのびています。カマドは扁平な礫を芯材として粘土でつくられていましたが、38 地点の SI74 住居では礫の代わりに土師器の大甕の破片を利用していました。

SI69 竪穴住居は大きさが約 6.5m 四方で、今回調査された中で最も大きいものです。北壁には東西にカマドが 2 つみられ、検出状況から、同時に使用されていた可能性があります。西側のカマドは、住居北壁の真ん中にあること、煙道の幅など、東側のカマドよりもやや規模が大きくつくられていることから、西側のカマドが本住居の主たるカマドとして用いられたと考えられます。

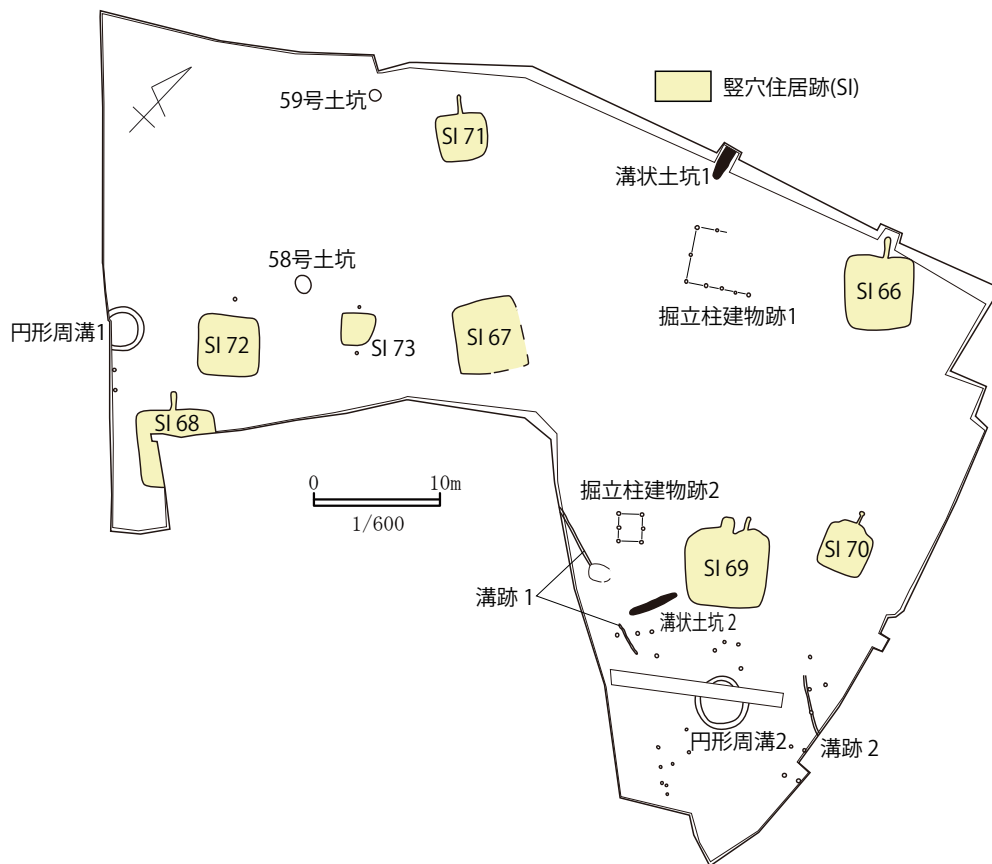
SI74 竪穴住居ではカマドの右側に土師器の甕の下半分を打ち欠いた置き台が出土しています。カマドの右側に置き台を配置する例は田面木遺跡 33 地点調査や八戸市櫛引遺跡 3 号住居でもみられ、これらでは完全な形の球胴甕が置き台の上に置かれている状態で出土しました。おそらく、貯蔵甕として利用していた土器を安定させるために用いられたと考えられます。この置き台は隣接する酒美平遺跡 1・10 号住居においてもカマドの右側にみられ、馬淵川流域ではカマドの右側に貯蔵甕を置くことが当時の風習であった可能性があります。

【遺物】 今回の出土遺物の中で注目されるものは、「関東系土師器」、「穿孔土器」です。

〔関東系土師器〕 関東地方で出土する土師器の特徴をもつもので、八戸では初めて発見されました。この土器は火災住居から出土しましたが、住居の焼土と炭化材の上か

ら出土していること、土器が火災による2次被熱を受けていないことを考慮すると、火災後に土器が故意的に置かれたと考えられます。この土器は関東地方などから持ち込まれたか、あるいは関東地方の土器をまねて八戸でつくったかは今後の課題ですが、当時の八戸と他の地域との交流を<sup>しよくぜんぐ</sup>考える上で、貴重な発見となりました。

〔穿孔土器〕 土師器の坏（食膳具）の底部には内側から穴がつけられた跡がみついています。この土器は調査区東側のSI69 竪穴住居から出土しましたが、新しいカマドの煙道部分に丁寧に置かれていました。この土器のように、穿孔された土器は飛鳥時代・奈良時代・平安時代の住居、あるいはお墓などから出土することがしばしばみられます。住居で出土する事例に関しては、住居を離れる際に行なわれた、祭祀儀礼であった可能性があります。  
 (杉山 陽亮)



田面木遺跡 37 地点遺構配置図



SI74 遺物検出状況 (38 地点)



置き台



関東系土師器 (SI67 出土)

# さかなか 坂中遺跡

## 1. 遺跡の概要

坂中遺跡は八戸市南東部に位置し、市の中心部から南東へ約 4 km、是川縄文館から約 4 km の地点に所在します。遺跡は新井田川支流の松館川右岸に形成された、標高 40 ～ 60m の南西方向に傾斜する段丘上に立地しています。遺跡の北側に石橋遺跡、南側には 7 世紀から 9 世紀後半の集落跡である市子林遺跡が隣接し、現状は宅地および畑地です。坂中遺跡では、1994（平成 6）年に約 200 m<sup>2</sup> の発掘調査が行われ、縄文時代後期の竪穴住居跡 3 棟・土坑 18 基、平安時代の竪穴住居跡 2 棟、時期不明の掘立柱建物跡・溝状ピットが見つかっています（第 1 地点）。平成 23 年度の調査は、当該地に擁壁を設置すること、また農地造成が行われることから、これに先立ち発掘調査を行いました。

## 2. 調査成果

調査は平成 23 年 8 月 25 日～ 10 月 5 日の期間で行い、発掘調査面積は約 250 m<sup>2</sup> です。調査区は遺跡の北西端に位置し、標高 56 ～ 58m の南西に向かって傾斜する地形となっています。調査の結果、平安時代の集落（ムラ）跡の一部が発見され、竪穴住居跡 4 棟（SI6 ～ 9 竪穴住居跡）が傾斜地で見つかり、土師器の坏・甕、耳皿、須恵器の甕（破片）、土製支脚、刀子などの鉄製品が出土しています。

竪穴住居跡は全て隅丸方形で、カマドとそれに伴う「煙道」が付いていました（SI9 竪穴住居跡は、カマドに伴う火床面のみ検出）。カマドの向きは SI6・7 住居跡が東向き、SI8・9 住居跡が北向きで、トンネル状に煙道を作っています。また、竪穴住居跡を掘り進める過程で、多量のカマド構築礫が出土しました。住居の床面は、南西に傾斜した地面を平坦にするために、貼り床が構築されていました。

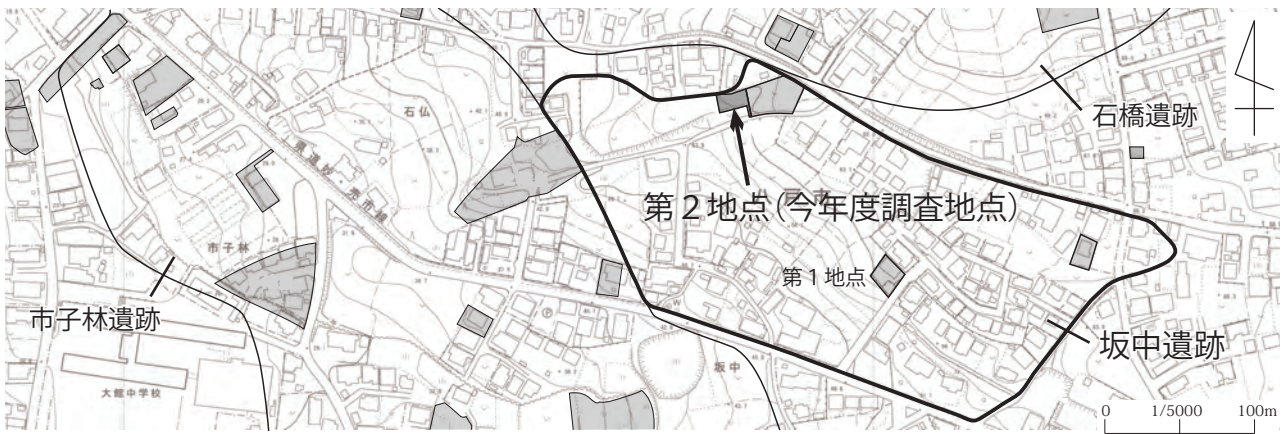
SI8・9 竪穴住居跡の堆積土中からは「白頭山 - 苦小牧火山灰」が検出されました。これは、中国と北朝鮮の境界にある白頭山の噴火によるもので、西暦 920 ～ 940 年に降下したとされています。坂中遺跡第 1 地点の SI1・5 住居跡では、西暦 915 年に十和田火山の噴火に伴って降下したとされる「十和田 a 火山灰」が検出されていますが、白頭山火山灰は見られませんでした。このことから、SI1・5 住居跡は SI8・9 住居跡（今年度調査）の住居跡より古いものであったことがわかりました。

SI6 ～ 9 竪穴住居跡から出土した土師器の坏の底面には、回転糸きり痕が見られ、ロクロでつくられています。また、器の内面に黒色処理をほどこしたものもあります。土師器の甕には、ロクロ成形したものは見られません。SI7 住居跡の周溝から出土した刀子には、柄に樹皮が巻き付けられたものが残っていました。日本の土は酸性土壌で有機物が残りにくいことから、貴重なものといえます。

## 3. まとめ

今年度の調査区からは 4 棟の竪穴住居跡が見つかりましたが、住居の並びから調査区の外に集落が続いている可能性が高いと考えられます。坂中遺跡第 1 地点の調査成果と合わせて考えると、坂中遺跡の中央から南西の範囲に、平安時代の集落跡が広がっていることが予想されます。（横山 寛剛）





坂中遺跡調査区位置図



坂中遺跡遺構配置図



第1号竪穴住居跡（西から撮影）



第1号竪穴住居跡カマド（西から撮影）

## 1. 遺跡の概要

八戸城跡は、八戸市内丸に位置する江戸時代の城跡を中心とする遺跡です。これまでの調査によって、縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・江戸時代の遺構・遺物が検出されています。

八戸城は、現在の三八城神社・三八城公園・八戸市公会堂に位置する本丸と、八戸市庁・南部会館・竈神社等が位置する二の丸から構成されています。寛永6年(1629)、盛岡藩の代官所として築城されたと伝えられ、寛文4年(1664)に八戸藩が成立した際に、藩主の居城・藩庁と定められました。その後、明治4年(1871)の廃藩置県によって廃城となり、取り壊されるまで、八戸藩二万石の居城として使用されました。

二の丸は、法霊社(竈神社)・八幡宮・豊山寺といった社寺のほか、一族・重臣の屋敷地となっていました。

## 2. 主な遺構

今回の調査地点は、二の丸の南東隅にあたる28地点で、調査面積は約160㎡です。現在の地表面から10cm～1m下で江戸時代以降とみられる柱穴・竪穴建物・堀跡を検出しました。

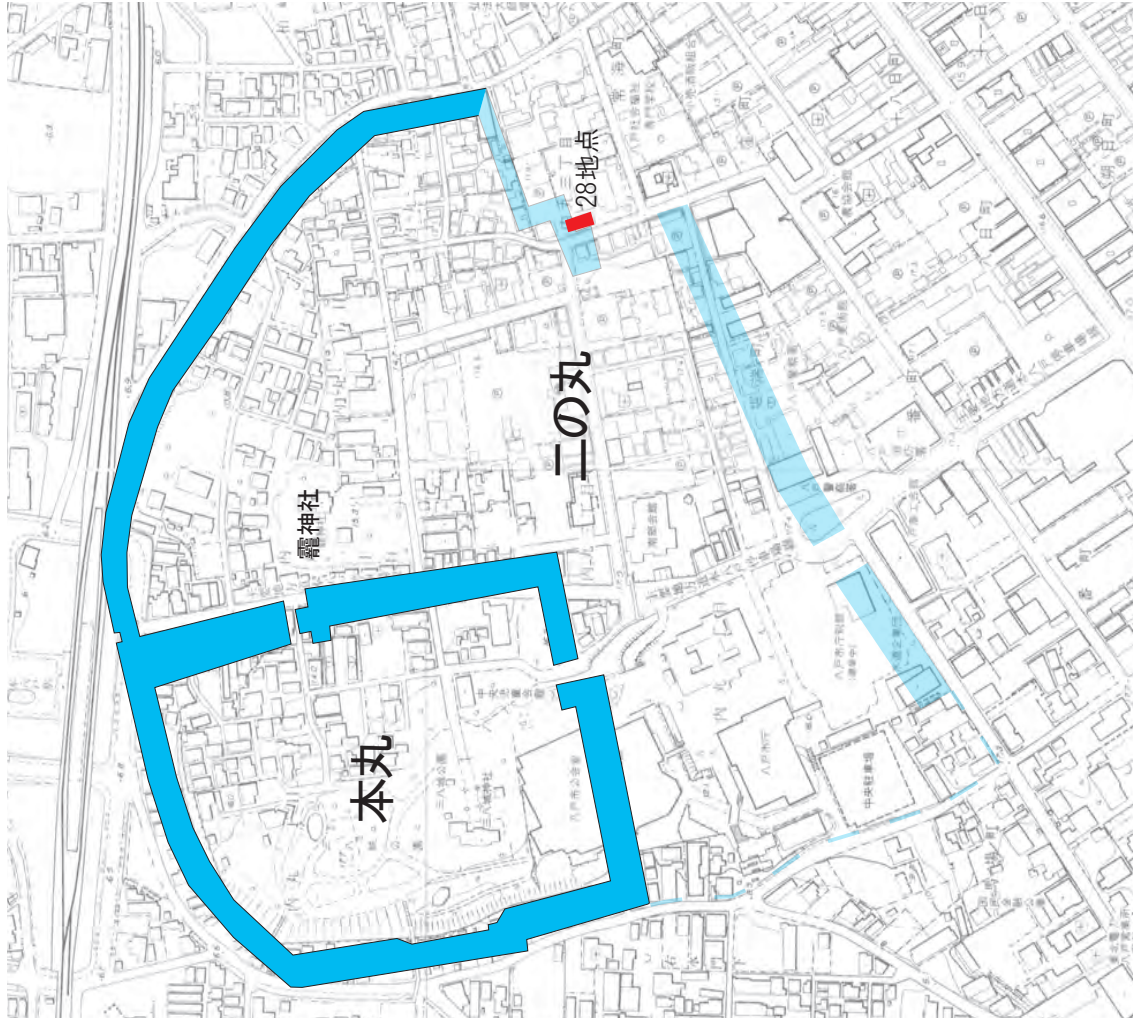
【堀跡】調査区北側でL字状に検出され、幅2.5～7m・長さ7.5mを調査しました。深さは現在の道路から2.7m、当時の地表面から約2mですが、調査区内で堀底が検出できなかったため、本来はさらに深い堀と考えられます。西端のL字状に広がった部分は、深さ1.1mと堀本体より浅くつくられていました。石垣・石積みを持たない素掘りの堀です。堆積土中からは江戸時代の陶磁器以外に明治時代の磁器やガラス瓶などが出土しているため、明治以降に埋められたと考えられます。

【竪穴建物】調査区中央で2棟検出しました。SI1は、南北4m×東西2.5m以上、深さ約1mで、西側に階段状の入り口がつくられており、地下室のような施設と考えられます。堆積土の最上層からは、破損した陶磁器、貝、魚の骨などが出土しており、最後はゴミ穴として埋められたようです。

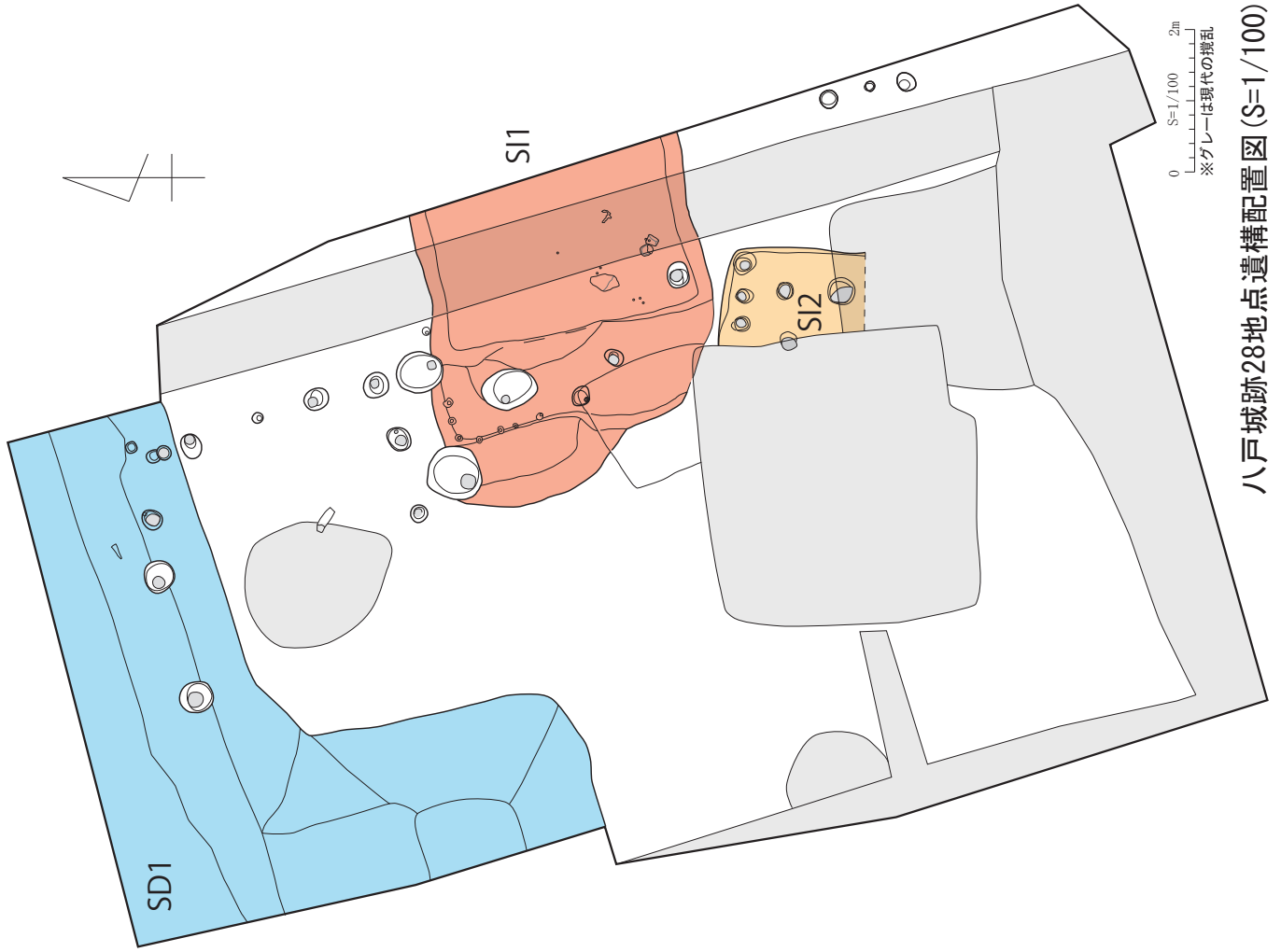
## 3. 主な遺物

江戸時代の絵図に描かれた八戸城外堀は、現在はすべて埋められてしまっています。今回の調査で堀跡が検出されたことで、八戸城外堀の位置がわかりました。また、堀の平面形はいくつかの絵図に描かれた形と一致しており、絵図の正確さも確認できました。絵図によれば、今回検出された堀は、八戸城東御門に近い場所であることがわかります。

堀の南側で見つかった竪穴建物は、絵図に記されている重臣船越家屋敷の建物の一部と考えられます。(船場 昌子)



八戸城跡範囲想定図 (S=1/5000)



八戸城跡28地点遺構配置図 (S=1/100)

第十回 八戸市遺跡調査報告会次第

- 13:00 報告会展示室開場 ( 2 階研修室 )
- 13:30 報告会受付開始
- 14:00 開会挨拶
- 14:05 平成 23 年度調査概要
- 14:15 調査成果報告 田代遺跡
- 14:35 調査成果報告 田面木遺跡
- 14:55 10 分休憩
- 15:05 調査成果報告 坂中遺跡
- 15:25 調査成果報告 八戸城跡
- 15:45 質疑応答
- 15:55 閉会挨拶
- 16:00 閉場 ( 報告会展示室は 16:30 まで )

